

令和元年6月定例会（第2日目）

本文 2019-06-25

○7番（堀 努君） 通告に従いまして、今回は市長の政治姿勢と市長マニフェスト2019「100日プログラム」をテーマに質問を進めてまいります。

自民党市議団は、さきの静岡市長選挙において、いち早く田辺市長の推薦を決定し、団結して選挙戦を戦い抜いた経緯があります。ですから、我々は田辺市長の3期目に対し、送り出したという自負と市民への説明責任があるわけです。本定例会は、田辺市長の再選後、初の総括質問日となりますので、この場を借りて、3期目に対する意気込みを再確認する機会とさせていただきます。

それでは、1回目は市長の政治姿勢をテーマとする中項目、市長選挙を受けてに関連した3点の質問をいたします。

1点目は、選挙戦を通じて田辺市長が受け取った市民の声について伺います。

田辺市長は、選挙期間14日間のうち、多くの時間を清水区での遊説に費やしました。日中は街宣車の助手席でマイクを握り、清水区全域をくまなく回りました。そして通行人を見かけると、急いで車をおりて駆け寄り、市政に対する要望はありますかと声をかけることを繰り返し行いました。選挙戦中終盤には、顔面が真っ黒に日焼けして、いかに田辺市長がその運動に時間を費やしたのかがい知ることができました。

私は、遊説に立ち会う機会がたびたびありましたが、市民からは実にさまざまな反応がありました。突然あらわれた市長に対

する驚きや戸惑い、喜んで一緒に写真を撮る人、中には無視する人もいましたが、いずれにせよ、田辺市長にとって市民の生の声を聞くことができた貴重な経験だったはずです。

田辺市長に対する声の一例として、子育て支援に力を入れてほしい、清水を何とかして、知事と仲良くしてほしいという意見が寄せられました。ほかにも、市内全域でさまざまな声を田辺市長は聞いてきたことでしょう。そして、市長選の争点の一つであった病院や庁舎の移転新築に関する声については、賛否両論ありましたが、津波浸水想定区域内であるがゆえの不安視する声は少なくありませんでした。一方で桜ヶ丘病院の事業主体が静岡市であるという誤解も多く、そこが今後の課題であることをつけ加えさせていただきます。

田辺市長は、1期目の就任当初から、市政運営方針として現地現場主義を掲げてきました。ですから、今回の厳しい現地の声をしっかりと受けとめて、現場に即した市政運営を重視するべきだと私は考えます。

そこで、質問します。市民の声をどのように受けとめ、今後どのように応えていくのか、お答えください。

2点目は、マニフェスト2019について伺います。

告示日に先立つ3月20日、田辺市長は1冊のマニフェスト集を発表しました。皆さんのお手元にその一部をコピーした資料をお配りしてあります。

さて、その内容を確認すると、今までにない新しい政策や、3次総と比較して具体的な記述が盛り込まれていることに気がつきます。例えば、新しい政策として新サッカースタジアムの構想づくりが挙げられます。今後4年間でサッカーのまち清水にふ

さわしい新スタジアムの建設の構想づくりに着手することが明記されています。実際に田辺市長は、選挙期間中にサッカースタジアム構想を幾度となく語っており、投票先の判断材料の1つになったと考えられます。私は、現在のIAIスタジアム日本平について、名勝日本平の麓に位置するすばらしいスタジアムであるという誇りを抱いております。しかし実際問題、交通アクセスや屋根のカバー率に関するJリーグ基準の課題がある影響からか、清水区民の新スタジアム待望論は想像以上に大きいことが、選挙戦を通じて理解できました。

さて、清水駅周辺にスタジアム建設を目指す場合に、想定される候補地は民有地であることから、今後基本構想の策定が足踏みしてしまうのではないかと懸念を私は抱いております。しかし、清水駅周辺のサッカースタジアム建設は、まちづくりの方向性が、現在進行中の新清水庁舎や海洋文化拠点施設建設と同じであり、この基本構想を早期着手することこそが、田辺市政が目指している都市ビジョンに対する清水区民の理解につながるものであると私は考えます。

次に、3次総より具体的な記述がある政策として、遺構展示が挙げられます。歴史文化の拠点づくりの項目で、駿府城公園内に、豊臣時代の天守台や大量の金箔瓦などを間近に見学ができる遺構展示を2021年度までに完成させると明記されています。私のイメージとして、遺構展示とは、先日視察に行き、実際に確認してきましたが、奈良県の平城宮遺構展示館のような、発掘された遺構を建物で覆い、露出展示をする手法が頭に浮かびます。

また、先進的な取り組みとして、全国初となる認知症予防センターの開設や、聞き

なれない単語ですが、Ma a Sという次世代交通システムの導入検討といった魅力的な政策が盛り込まれているのもこのマニフェストの特徴です。

3次総があるにもかかわらず、マニフェストを作成した理由とは何か。本冊子によると、有権者との約束、曖昧な公約や思いつきの発想ではなく、権限と財源の裏づけのある明確な宣言文、そして3次総の後期実施計画に裏づけされているなどと明記されています。

以上のことから、田辺市長には本マニフェストを有権者に対する約束として必ず実現させるという強い決意と、職員に対して確実に実行するんだという強固な意志を示すことが求められています。

以上を踏まえて質問します。マニフェスト2019をどのようにスピード感を持って進めていくのか、お答えください。

3点目は、今後の清水区のまちづくりについて伺います。

田辺市長は、再選直後のインタビューで、選挙を通じて課題が見えた。丁寧な説明を重ね、もっと清水に愛される市長になりたいとコメントしました。今回の市長選挙で、田辺市長の得票率は49.6%でした。その特徴として、清水区の得票率は45.4%で、旧静岡市と比較して6.5ポイントも低く、その結果全体の得票率が5割を下回る原因となりました。

その主な要因として、静岡新聞が行った清水庁舎移転に関する出口調査で、反対が42%に上ったことからわかるとおり、市民の世論を二分するかのよう争点があったからだと推測しています。桜ヶ丘病院と清水庁舎に関しては、あくまで私の肌感覚ですが、清水区民の関心度や考え方、賛否は、地区ごとに違いがあると感じておりま

す。

具体的には、中心市街地在住の区民からは否定的な意見が多く、一方で、郊外在住や中山間地域の区民からは、交通アクセス向上のメリットがあるためか、反対意見は少なかったということです。また個別に言うと、例えば、高部地区では、長年の悲願であった桜ヶ丘病院の移転をあきらめざるを得なかったわけですが、JCHOの決断に一定の理解を示したことで、現在はかつての候補地に、交流館新設と多目的公園の整備実現に向けて懸命に取り組んでおられます。

マニフェスト2019の表紙には「このまちを、ずっと、みんなで」と大きく書かれています。これはSDGsの主要テーマ、持続可能な開発目標と誰一人取り残さないを言いかえたものです。田辺市長は多数決によって、再び信任を得たわけですから、今後の清水区のまちづくりで重要なことは、持続可能な清水区の実現に向けて、強い信念とスピード感を持って市政運営に臨んでいただくこと。それと同時に、誰一人取り残さないという思いのもと、田辺市長に投票しなかった市民に対して耳を傾けることこそ大切な姿勢であると私は思います。

もう一つ、市長選挙を通しての気づきですが、清水区の活性化には、海に加えて山の視点も不可欠です。中部横断自動車道を起爆剤として、オクシズや清水港の后背地をどのように掘り起こしていくのか、田辺市長の手腕が試されています。

そこで、質問します。今後、清水区のまちづくりをどのように進めていくのでしょうか。お答えください。

以上、1回目の質問を終わります。

28〇市長（田辺信宏君） 大項目、市長の政治姿勢のうち、市長選挙を受けてについて、3つの質問にお答えいたします。

まず1つ目は、市民の声をどのように受けとめ応えていくのかについてですが、議員御指摘のとおり、今回の選挙戦において、私は有権者との1対1の対話を心がけた遊説を行いました。その中で感じたことは、3次総や5大構想、静岡市が今進めている取り組みが必ずしも正しく伝わっていないという事実であり、それを無念の思いを持って受けとめています。したがって、3期目は「伝える」のではなく「伝わる」という視点に重点を置き、市民目線のわかりやすい情報発信を心がけて、市民の皆さんの声に応えていきたいと考えています。

2つ目は、マニフェスト2019をどのようにスピード感を持って進めていくのかについてであります。今回のマニフェストには、もちろん最優先政策としての5大構想も公約として掲げておりますが、3次総には記載されていない新しい政策も取り入れております。

その中で、この4年間、私がスピード感を持って取り組んでいきたいと考えているものは、幾つかありますが、その2つを紹介したいと思います。それは、公共交通政策の切り札としてのMaaSの推進と、健康長寿のまちづくりの目玉としての認知症の予防という2点であります。

まず、MaaSの推進であります。これはまだ、人口に膾炙していない聞きなれない言葉であります。モビリティ・アズ・ア・サービス——公共サービスとしての移動手段と直訳されますが、最新のICT、情報通信技術を活用し、交通手段を一体的に提供する仕組みのことであります。これが実現すれば、現在の静岡市が抱える交通

弱者への対応という行政課題を解決する可能性が高まります。私の思いとすると、このごろ全国で頻発する高齢者ドライバーによるアクセルとブレーキの踏み違いによる悲惨な事故を静岡市においてなくしていきたいという思いであります。

そのマニフェストで掲げた新しい政策を受けて、都市局を中心にスピード感を持って対応してくれました。国土交通省と経済産業省がそれぞれ実施するモデル事業に挑戦をし、エントリーをし、その結果、先日朗報が入ったばかりであります。全国28地域の応募に対して、私たちはダブルでの選定を受けることができました。国交省と経済産業省、両方とも選定を受けたのは、全国75地域からの申請があったうちの4つの地域のみであります。これによって、今後国と強力に連携をして、MaaSの事業を進める環境が整ったということをお願いしたいと思います。先月設置されたコンソーシアムを中心にして、今後この夏には、官民合同で先進地視察を行いますので、議員の皆様にもぜひ御参加を呼びかけたいと思いますし、また秋には、人工知能——AIを活用した相乗りタクシーの実証実験まで進めてまいりたいと考えています。

もう一つが、認知症の予防であります。これも今、全国的な課題になっていますが、本市の場合、推計によると2025年には約3万人の潜在的認知症患者があらわれというふうに言われています。その認知症患者を少しでも減らしたいという思いで、このことに注力をしていきたい。幸い本市のこの取り組みに国が後追いをするように、先日、認知症についての推進大綱が決定されました。国の制度や国が進める施策と上手に連携して取り組むことによっ

て、スピード感を持った施策の推進ができますので、政令指定都市の立場を大いに生かして、全国初の仮称認知症予防センターの設置につなげてまいりたいと考えています。

3つ目は、今後の清水区のまちづくりをどのように進めていくかについてであります。一言で言えば、清水区が持つ海と山のそれぞれの地域資源を、バランスよく両立させてまちづくりを進めていきたいということです。清水港や駿河湾といった海を生かしたまちづくりとは、クルーズ船の増加や、開港120周年を迎える清水港、新たなシンボルとして考える海洋文化拠点施設などを含め、昨年度、官民連携のもとで描いたグランドデザインを着実に進めていくことに尽きます。そして将来的には、このグランドデザインに描かれている三保地区や興津地区などへエリアを拡大していくことによって、清水港沿岸部全体の魅力づくりを具現化していきたいと考えています。

一方、山、中山間地域を生かしたまちづくりとは、甲信越地方との交流や物流を大きく変え、議員も先日、そのことで山梨県にプロモーションに出かけてくださったと伺っておりますが、中部横断自動車道の活用を図るとともに、両河内地区への新しいスマートインターチェンジの設置や、既に先月、JAしみずや静岡県などの関係者による組織を立ち上げた畑地総合整備事業、いわゆる畑総などの検討を進め、中山間地ならではのまちづくりを図ってまいります。

一方、多くの市民の皆さんから期待を寄せられている新しいサッカースタジアムにつきましては、まずはサッカーのまちにふさわしいスタジアムの構想づくりに着手し

ていきたいと考えています。

以上、申し上げた沿岸部と中山間地域を両立したまちづくりを推し進めることによって、清水区が魅力を増し、活力あふれる地域となり、世界中から人が集まり、そして雇用が確保され、にぎやかさを増す、そのことが静岡市全体が元気なまちとなる。堀議員とともに今後も取り組んでまいりたいと考えております。

〔7番堀 努君登壇〕

29〇7番（堀 努君） 2回目は、市長マニフェスト2019「100日プログラム」をテーマとします。

これは、田辺市長がスピード感を持って就任100日以内に成果を出す身近な取り組みであると明記されています。3期目の任期は4月13日からですので、7月21日までに成果を出さなければならない政策となります。

100日プログラムは、5項目あります。その1つ、「しずおか魅力掘り起こしツアー」は、市内の隠れた観光資源を市長と一緒に巡り、静岡市の魅力を掘り起こすことを目的として、一昨日に第1回目が開催されました。成果として、田辺市長が参加者の生の声を聞くことで、新たな気づきを得たこと。そして参加者のシビックプライド醸成に寄与する取り組みであったと聞いております。

もう一つ、職員コンシェルジュについては、昨年の実証実験を踏まえて、7月1日より各庁舎にてスタートします。他都市の事例として、青森県弘前市では、昨年10月からコンシェルジュ制度を導入しました。その目的は、来庁者が気軽に安心して手続等ができるように、きょうも笑顔で常にお客様目線で親切・丁寧に、お客様に最高のサービスを提供するためということで

す。ぜひ静岡市でも参考にさせていただきたいと存じます。

それでは、中項目に沿って、3点の質問をいたします。

1点目は、わくわく給食について伺います。

これは、魅力的な給食を月に1度提供することで、子供たちが学校に行くことが楽しみになること、そして食育や地産地消に役立つ取り組みであることが明記されています。また、その費用は静岡市が負担することとされています。今回と同様の取り組みは、静岡県内においては、吉田町、牧之原市で実施されました。9小中学校でことし1月、特別給食メニューが提供されて、その献立は吉田漁港で水揚げされたシラスを使用した特製コロケと、牧之原市の大根を使用した炒め物でした。また長泉町では、ユニークな取り組みとして、ことし2月、5小中学校で、受験生への験担ぎとして、町内産の野菜を使用した「長泉あしたかつ」という特別メニューが提供されました。そのほか、横浜市では市内9小学校で、昨年11月、未利用魚を活用した特別メニューが提供されました。一般には流通しない子イワシをカレー風味の揚げ物にして、水産資源の有効活用と食育を兼ねた取り組みでした。

さて、今回のわくわく給食は、3次総後期実施計画における事業名、日本一おいしい学校給食の提供に関するソフト面での政策であると認識しております。静岡市は、平成28年度より日本一おいしい学校給食を目指して、静岡ならではの献立の研究を進めてきました。そしてその成果を生かす場として、昨年12月、全国学校給食甲子園に応募して、シラス御飯やオクシズの煎茶入りクリーム大福といった、静岡らしい

地場産品を使ったメニューが考案されたということです。ぜひこれまでのノウハウを生かして、わくわく給食が静岡市の食育や地産地消に貢献した上で、子供たちが学校に行くのが楽しみになることを期待しています。

そこで、質問します。わくわく給食の目的と概要についてお聞かせください。

2点目は、市長ミーティング室について伺います。

これは、静岡庁舎内の市長室を中心に行われている公務を、駿河区役所と清水区役所にもシンプルな市長ミーティング室を設置することで、地域の方々との面談や職員との協議などを行うためであると明記されています。

参考例として、平成17年に合併した牧之原市では、榛原庁舎に市長室を置き、車で15分程度離れた相良庁舎には、市長と副市長共用の執務室が整備されています。執務室の利用頻度は、議会が相良庁舎にあるため、定例会中は使うことが多いこと、そして相良地区で公務がある場合に利用しているとのことでした。

さて、先日清水区で開催された第1回目の市長ミーティング室に関する報道では、田辺市長が清水庁舎の各課へ足を運ぶ姿が映し出されており、ふだんはなかなか顔を合わすことができないという職員が、市長から直接激励の言葉を受ける姿が印象的でした。恐らく、田辺市長自身もこの取り組みを通じて、新たな発見があったであろうと推測されます。初回ということもあり、まずは職員との連携強化ということで、清水庁舎内の巡回を行ったと思われませんが、もう一步踏み込んで、田辺市長みずから現地現場へ足を運び、しっかりと耳を傾ける取り組みは、職員に対してだけでなく、清

水区民の皆様に対して積極的に行うべきものとは私は考えます。

そこで、質問します。行政の取り組みとして、市長ミーティング室の実施に至る背景とその取り組み状況、今後の展開をどのように考えているのか、お答えください。

3点目は、まちかどピアノについて伺います。

これは、「まちは劇場」プロジェクトの取り組みとして、街角に自由に弾けるピアノを設置することで、いつもあちらこちらからメロディーやリズムが聞こえるまちを目指すという明記されています。5大構想の1つ、「まちは劇場」とは、文化芸術の力を活用して、365日いつでもわくわくどきどきする楽しい仕掛けをつくることで、交流人口の増加と地域活性化を実現する政策であると理解しています。

田辺市長は、昨年11月定例会における福地議員に対する答弁で、「まちは劇場」のメリットを文化的・社会的・経済的という3つの価値があるということの説明をしました。内容を要約すると、文化的価値とは、生活の質を高めてシビックプライドの醸成に寄与すること。社会的価値とは、ソーシャルインクルージョンの視点に立ち、共生社会の位置づけに寄与すること。経済的価値とは、交流人口が増加することで、地域経済の活性化に寄与すること。以上のメリットがあるということです。そこから分類すると、今回のまちかどピアノは、文化的価値に着目した政策であることがわかります。

さて、公共空間に置かれたピアノを誰でも自由に弾ける、いわゆるストリートピアノが最近各地で注目を集めています。昨日も放映されましたが、NHKのBS1チャンネルで、昨年1月よりスタートした「空

港ピアノ」、「駅ピアノ」という番組は、主にヨーロッパを中心とした世界各地のストリートピアノに固定カメラを設置して、通りすがりの一般人が演奏する様子を簡単なエピソードをあわせて紹介するという番組内容が、現在SNS等で話題となっています。余談ですが、世界最初のストリートピアノは、2008年のイギリス、バーミンガムが発祥とされており、国内においては、2011年の鹿児島市一番街商店街とされています。

静岡県内に目を向けると、JR浜松駅の新幹線構内において、ピアノをPRする目的で誰でも弾ける高級ピアノが楽器メーカーにより設置されました。1,900万円のグランドピアノを自由に演奏できるということで話題となり、動画サイトYouTubeに投稿された演奏シーンは、視聴回数400万回以上を数えるものもありました。静岡市では、まちは劇場コンサート事業として、学校訪問コンサート、親子クラシックコンサート、まちかどコンサートが定期的開催されています。これらは、多くの市民に「まちは劇場」を実感していただくことのできる大変すばらしい取り組みです。そのうち、まちかどコンサートについては、オープンスペースで誰でも身近に生演奏の音楽に触れることができるコンサートということで、今回のまちかどピアノと調和しやすい取り組みです。設置場所の選定に当たり、考慮されていると思いますが、いかがでしょうか。今回のまちかどピアノについては、ほかにもピアノの調達方法や管理方法など、検討を重ねてこられたと思いますが、ぜひ他都市の事例を参考にさせていただき、多くの市民に親しまれるまちかどピアノにさせていただきようお願いします。

そこで、質問します。まちかどピアノの目的と概要を教えてください。

以上で2回目の質問を終わります。

30〇教育局長（遠藤正方君） わくわく給食の目的と概要についてですが、わくわく給食の目的は、静岡自慢のブランド食材を使った特別の給食を提供し、子供たちが地域の地場産物や食文化について学ぶことを通して、郷土静岡への愛着と誇りを育むことです。このために、7月から年6回、通常の給食費に公費で1人1回300円程度の食材料費を加え、ふだん給食で取り扱いきにくい釜揚げシラスや安倍川餅などを給食で提供します。友達とともに給食を食べた思い出と郷土の歴史や文化を結びつけ、生涯にわたって静岡への愛着や誇りを持つ静岡市民を育てていきたいと考えています。

31〇総務局長（豊後知里君） 市長ミーティング室の実施に至る背景、取り組み状況等についてですが、市長ミーティング室は、市政運営の原点である現地現場主義を標榜する田辺市長の強い思いから実施するもので、市長室のある静岡庁舎のみならず、駿河区と清水区にも市長の活動拠点を構え、現地現場により近い場所で執務を行う取り組みです。令和元年度は全15回を予定しており、市長ミーティング室において、現場で市政を支える職員との政策協議を重ねるとともに、あらゆる分野で活躍する企業や団体の皆さんのもとに直接赴き、先進事例の視察や意見交換などを行うこととしています。

今月7日に開催した清水区では、清水庁舎の4階会議室を拠点として、区のプロジェクトに係る職員との協議などを行うとともに、三保へと足を延ばし、最先端の海洋研究活動の成果を有する東海大学海洋学部や、三保真崎地区の新たなリゾート開発に

取り組む民間企業とも意見交換を行いました。

今後4年間、静岡を1つにを合言葉とし、市長ミーティング室を継続的に開催していくことで、市民の皆さんが抱く希望や期待の声を受けとめ、魅力ある市政運営に取り組んでまいります。

32○観光交流文化局長（大石貴生君） まちかどピアノの目的と概要についてですが、本市では「まち劇場」の推進の一環として、平成30年度から、まちなかに本市の資産である大道芸などのパフォーマンスを行うことができるまち劇場パフォーマンススポットを8カ所設け、まちを歩く楽しみとアーティストの活動の場を提供する取り組みを行っております。

こうした中、まちかどピアノは、まちなかに誰でも自由に弾けるピアノを設置することで、音楽に親しむ場が生まれ、多くの人に表現の場を提供するという新たなまちは劇場パフォーマンススポットとして進めてまいります。ここでは、ピアノを弾く人と聞く人の交流も期待でき、またふだん足早に歩いていた人がピアノの音に足をとめることで、まちに対する新たな気づきも生まれるなど、まちに活気を生み出すことを目指していきます。

本市第1号のまちかどピアノは、玉川小学校で使用していたピアノを再利用し、清水駅前銀座商店街に、地元の皆さんの協力を得て常設する予定です。お披露目は、清水港開港120周年記念事業・開港祭と、銀ぶらマルシェの開催日に合わせ、7月14日曜日（日曜日）を予定しています。市民の皆さん、もちろん議員の皆さんにも、ぜひピアノを弾いていただき、日常の中で気軽に芸術文化に触れること、本市のまち歩きには音楽もあるという風景、まさに「まちは劇

場」空間を楽しんでいただきたいと思います。

〔7番堀 努君登壇〕

33○7番（堀 努君） 3回目は、意見・要望を2点申し上げます。

1点目は、県市連携についてです。

田辺市長に対する市民の声として、知事と仲良くしてほしいという意見が少なからず寄せられましたが、これも市長選の争点の1つとなったと言えます。その声を受けて、田辺市長は当選直後のインタビューで、県との関係も構築していかなくてはいけないと語り、4月8日、早速県庁へ赴き、川勝知事に面会を求めました。田辺市長は川勝知事に対して、これまでのことをノーサイドにして、未来志向で県と良い関係をつくりたいと、関係改善の申し入れを行いました。余談ですが、ノーサイドとはラグビー用語で試合終了を意味しますが、現在は日本以外で使われることはありません。そして、日本においては、試合や争いが終わった瞬間に、敵味方の区別がなくなり、互いの健闘をたたえ合うという意味で、政治の場でも使われることがあります。田辺市長のノーサイド発言には、川勝知事が自身のノーサイド発言をみずからほごにしたことに対する許しの言葉であったと私は感じています。

一方で、川勝知事は、市民が立ち上がれば、極端な場合リコールもあり得るとの発言でもわかるとおり、極めて冷淡な反応を示されました。その後、川勝知事は、4月10日の定例記者会見で、県市連携の手段として、知事特命を設置するので、静岡市にもカウンターパートナーとしての交渉窓口を設けるように求めましたが、トップ会談以外の場で田辺市長と会う機会をふやす機会はあくまでないということでした。それ

に対して田辺市長は、副市長、副知事の連絡会議が既にある。必要とあれば知事に会うとして、窓口設置を拒否しました。

私は、田辺市長の秘書時代に幾度か仕事の愚痴や人間関係の悩みを相談したことがありましたが、いつも決まってする田辺市長のアドバイスは、「それも人生の修行だと思え」でした。田辺市長御自身はいかがお考えでしょうか。

川勝知事が望む縣市連携と、静岡市が目指すべき縣市連携は、違っていいと私は考えています。知事のたび重なる市政批判こそ、静岡市との二重行政の最たるものであると言えるからです。田辺市長には、川勝知事の言動を真正面から受けとめず、市民にとって本当に必要な縣市連携、例えば、静岡県が実施主体とされる防潮堤の早期建設実現に向けて取り組んでいただくよう要望いたします。

2点目は、清水区の一体感醸成についてです。

田辺市長は、選挙戦で聞いた市民の声を受けて、当選後、合併した成果を出したいとコメントし、清水区を念頭に静岡市の一体感醸成に取り組む決意を固めました。実際、現在の清水区民は、合併して16年経過したにもかかわらず、いまだにその恩恵を実感できておりません。私は議員の説明責任として、例えば、清水区民の飲用水を安定供給するために、旧静岡市側からの水道ルートを引き込んだこと、清水区から排出されたごみの受け入れを旧静岡市の清掃工場が行っていること、公立小中学校の耐震化、合併特例債を活用した清水文化会館の移転新築のことなどを例に挙げて、市民に理解を求めますが、それで納得される方はほとんどいません。それは、合併前から漂う停滞感を政令市に移行してからも払拭

できていないことに起因しています。

田辺市長は、選挙期間中、公共投資を呼び水にして民間投資を促し、経済の好循環を実現していくとの訴えを繰り返しました。今後、清水活性化の起爆剤として、政令市のスケールメリットを生かした海洋文化拠点施設建設が控えています。完成までには、少なくともあと4年かかるわけで、それまで合併の恩恵は待ってくださいということであれば、清水区民は到底納得できないわけです。

そこで、具体的な要望ですが、清水区の一体感醸成に向けて、市民に合併した成果を感じてもらおう経過措置として、海洋文化拠点施設の建設予定地に、完成図を描いた大型看板を設置していただくようお願いいたします。また、周辺の都市ビジョンを含めたリアルな完成予想図を映像化していただき、広く市民に提示していただければと思います。広報紙やSNS、田辺市長の定例記者会見だけでは伝わり切れません。

最後に、今回は田辺市長の背中を後押しすることを念頭に質問した結果、厳しい内容となってしまいました。田辺市長の3期目に対して、嵐の中の船出との意見もありますが、必ずや荒波を乗り越えて、令和の初代静岡市長にふさわしいかじ取り役を担っていただくことを期待して、総括質問を終了します。ありがとうございました。